



タイムトラベラー

greentea0117

タイムトラベラー

もしもタイムトラベルができたら――悲惨じゃないだろうか。タイムトラベルができなくても、日常は問題が山積みなのに、この上非日常の心配もしなくてはならないのだから。

と思っていたのに、私が生きている間にタイムトラベルの方法が開発された。そしてあれよあれよという間に、倫理上の問題がクリアされ、特殊な訓練を受けた人ならタイムトラベルできるようになった。そしてあれよあれよという間に、一般人でもそれなりの訓練を受ければ、タイムトラベルできるようになってしまった。

そして今では気軽に旅行に行くように時空を行き来できる。ドラッグストアに売っている、一見ビタミン剤のような錠剤を買い、食後に飲めばいいのだ。一時間後、一錠なら一年後、二錠なら二年後、と錠剤の数に合わせてタイムトラベルできる。行きたい年数だけ、錠剤を飲めばいい。

ちなみに過去へのタイムトラベルは法律で禁止されている。もうすでに起こってしまったことを自由に変えられては、混乱が生じる。未来へは、どうぞご自分の責任で、ということらしい。つまり一度未来へ行ってしまうと、もう、過去へ戻ることはできない。それでもタイムトラベルする人は後を絶たない。ある人は大々的に壮行会を開き、ある人はひっそりと、未来へと旅立つ。

目の前のテーブルに瓶がある。錠剤の色は灰色だ。絶対に関わり合いたくないと思っていたのに、それは極端な興味の裏返しであつたらしい。タイムトラベルしてみたい。未来へ行ってみたい。その気持ちを止めるほどの重大なにかを現在に持ち合わせていないことに気付いてしまった今、私は掌に二十粒の錠剤を出した。二十年先なら私を覚えている人は少ないだろう。周りは二十年としをととり、私は今のままだ。別にその優越感に浸りたいわけではない。ここでないどこかへいくという、昔から漠然と抱いていた思いを満たすために行くのだ。

私は二十錠を口の中に放り込んだ。途端に周りの景色が消えた。胃が体の中でよじれるような気がした。稲妻のような光が落ちたかと思うとそれもまたぐにやりとよじれた。とても見ていられるような光景ではなかった。けれど私はそれを経験したいがために現在を捨てたのだ。意地でも目を開いていようとしていた私は頭の後ろをごうんと何かで殴られたかのような鈍い衝撃を感じ気を失った。

目を開けると私は二十年後の同じ場所にいた。というかそのはずだった。何かがひゅんと空中を飛んでいった。私はベンチに座っていた。私は立ち上がった。どうやら私がいたアパートは取り壊されたらしかった。

未来に行ったらやってみたいことがあつた。それは友人を訪ねたとき、彼らが私と気づくかどうか、気づくまでどれくらいかかるか、ということだった。さっそく私は友人Bのところへ行っ

てみた。果たして彼は同じところに住んでいるだろうか。

ところが彼のアパートも取り壊され、公園になっていた。気づけば、公園やアパートなど人の住むような建物は見当たらない。建物といえば天を突くような細長いビルばかりだ。奇跡的に電話ボックスがあった。それは二十年前とほとんど変わらないように思えた。私は異国で偶然同郷の人をみつけたかのようにふらふらと近づいていった。

電話自体もあまり変わってはいなかった。あまり期待していなかったが、やはり電話帳はなかった。かわりにタブレット端末が電話機とチェーンでつながっていた。名前、電話番号、旧住所など聞かれるがままに答えると、Bがここから遠くない摩天楼の一つに住んでいることが分かった。やつはやはり出世したのだろう。昔からその秀才ぶりに嫉妬していたが、とにかく今の私はやつより二十歳若い。その二十年でやつができなかったこともやり遂げることができるかもしれない。なんともいえない、奇妙な感情を抱いて、街を歩いて行った。

友人Bにはかなり年の離れた兄弟がいた。その兄弟の知り合いという体でたずねていくことにする。疑われるかもしれないが、Bがすぐに私と気づくかもしれない。Bは摩天楼の二五階に住んでいた。しゅんと移動するエレベーターを降りると、細長い廊下にたくさんのドアがずらりと並んでいた。ドアとドア間隔が異様に狭く、貸し倉庫か何かのようだ。

「二五〇三、二五〇三」 呟きながら部屋を探した。ドアが開いた。ドキドキとしながら身構えていた私は、啞然とした。自分がどうみられるかばかり気にしていた。思えば当たり前なのだが、Bは二十年分年をとっていた。「あんた誰だ」 Bは用心深く聞いた。それでもその瞳の奥に、記憶を探るような疑問符を私は見たような気がした。「通の知り合いです。通がこの近くに住んでいるのを思い出してたずねたんですが」「通の？ 通は今海外にいるよ」 Bの目がさらに用心深くなった。僕はBから聞いた通のエピソードやB自身の情報を頭の中で検索した。「通とは同じ剣道部にいました。と言っても試合では僕は通と同じくいつも補欠部員でしたが。お兄さんのことも、通からときどき聞きました。秀才でR大学に入った、ちょっと煙たい兄がいると」 私はBの表情をうかがった。「お前、今沢だな」 Bは目を細めて言った。「ああ……」「タイムリープしたんだっけ。これがタイムリープ後の感動の再会ってわけか」 Bはまじまじと私を見た。「正直、変な感じだな。全然変わらないなって言うのも変だし。奇妙に変わらないと言うか」「お前はちゃんと年とってんな」「当たり前だろ。お前と違って苦難の二十年を歩んできたんだからな」 私はBの部屋に入った。白に統一された部屋は、コンパクト、機能的、奇妙だった。何か丸っこいものがふわふわと浮いていた。Bが指さすと、照明がついた。「これが二十年後の世界か」 私はひとつきりある大きな窓から外を眺めた。宙をひゅんひゅんと何かが行きかっている。「あれは？」「自動車だよ。行き先を言えば、あとは自動操縦だ」「にしても進歩しすぎじゃないか？」「そりゃお前にしてみればな。でも二十年普通に生きてれば、ま、こんなもんかなと思うよ」「へえ」 こんなもん？ どう考えてもこれはもっと先の世界だ。百年後とか。同時にBが言っていることが本当だということもわかった。日々生きるってというのは世界と一緒に生きるということだ。摩天楼がよきによきとたち、雲の中に隠れていた。「普通の家とかアパートとかはなくなったのか？」「そうだな、今はほとんど全員がタワーのどこかに住んでる」「なんか、味気ないな」「そうか？ そういえばそうかもしれないな」 Bは二十年後の世界を案内してくれるという。私がタイムリープしても変わらず接してくれることに感動し、「タイムリープしてよかったな」 とつぶやくと、Bは少し苦笑いしたように見えた。「なんだよ」 と言うと、「いいことばかりなんてあるわけないだろ」 と言って、外に出た。街は整然としていた。あまりにも整然としすぎているような気がした。

イラスト

昔からイラストを描くのがうまい子がいた。

「馬を描いて、火星を描いて、机を描いて」

何を頼んでも、鼻歌交じりにすぐに書き上げてしまう。写実的にうまいというわけではないけど、どれもころんとしていてかわいい。

「うーむ、すごい」

子供心に私は思った。単純な作風なので誰でも描けてしまいそうだけど、でもいざ描いてみると、やっぱり全然描けない。内心とてもうらやましく、ほめるかわりに、手持無沙汰な時や、退屈な授業中、あれも描いて、これも描いて、と思いつくものすべて描いてもらった。その子は嫌な顔一つせず、にこにこ鉛筆を走らせた。あっというまにキャベツや、シマウマや東京タワーが紙の上に現れた。

その子の名前は田所ほのかといった。私はほのかに描いてもらった絵を紙ファイルにきっちりと整理した。答案用紙の裏、ノートの切れ端、お知らせプリントの隅などイラストの描かれた場所はさまざまだったが、すべてきちんとファイルした。そうして私は自分だけのイラスト帳を作っているつもりだったのかもしれない。

「そうだ四コマ漫画を描いてよ」

ある時私はふと思いついて言った。ほのかの書いたきつねの絵が今にもくるんと回って踊りだしそうだったからだ。

「ええ、漫画？ 漫画ってどうやって描くの？」

「そんなの知らないけど、オチを考えるんだよ」

「オチかあ」

イラストだけならさっと描いてしまえるのに、四コマとなるとほのかはうんうんとうなっていた。授業そっちのけで、一日かかって描いてくれた漫画は、素晴らしいできだった。

「これはもう、プロの域だね」

私は本心から言った。私の紙ファイルに入れておくようなものではない。

「なに言ってんの。でもおもしろかった？ じゃよかった」

ほのかはふふといつもの調子で笑った。

「これはもらえないよ。ほのか持っておきなよ」

「ええ、せっかく渾身の作なのに」

「もう教室の後ろの壁に貼っておきたいくらいだよ」

「え？ 絶対だめ」

「じゃあさ学級新聞に載せようよ」

学級新聞は基本的に先生が作っているのだけど、何か載せたい人がいたら先生に頼めば、載せてくれた。

一日かかってほのかが考えた漫画はこんなおちだった。女の子が学校へ登校したら、教室には誰もいなかった！ 女の子はてっきり創立記念日だと思い、自分だけが間違えて登校したのだと思った。帰ろうとすると、運動場の上にふわふわとUFOが浮いていた。学校中がUFOにさらわれたのだ！ 女の子は急いでノートを取り出し小人と弓矢を描いた。絵はノートから飛び出し小人はUFOにむかって弓矢を放った。みんなは無事、帰ってきた！

この漫画が学級新聞に載るとみんながほのかの周りに寄って来た。ほのかが絵がうまいということは周知の事実だった。でもこの漫画！

「誰かに描いてもらったの？」

と失礼千万なことをいうやつもいたけど、でもまあそう思われても仕方がない。

「学校で一日かかって描いた力作だよ」

ほのかも遠慮するのをあきらめ、堂々とすることにしたらしい。

「すげえ」

男子も感心し、

「へへへ」

ほのかは笑った。

鶏

うちでは鶏を飼っている。別に田舎ではない。犬を飼うように鶏を飼っているのだ。

鶏を捕まえるには、後ろからそっと挑まなくてはならない。そうして距離を詰めることができたなら、両手で一気に包み込むように持つ。残念ながらうちの鶏はおとなしいタイプではない。すべての鶏の雄がそうなのかはわからないけれど、人間のなすがままおとなしくしているタイプではない。持ち上げられてもあきらめず身をよじる。その力に逆らわないように持ち具合を調整するのは熟練の技と言っていいだろう。

うちの鶏は毎朝、ときを声をあげる。

「コケコッコー」

とそれはうるさい。幸い近所の人には話をして、許してもらっているものの、毎朝びくびくする。

「ガリちゃん、もう少し遠慮目にコケコッコー言えないものかね」

私はつぶやく。ガリちゃんというのは小さいころ食が細く、やせっぽっちだったことからつけられたニックネームだ。あのころは育たないかもしれないと、エサを工夫したり湯たんぽを用意したりと、手をかけたものだ。結果ガリちゃんは立派に成長した。少し元気すぎるくらいに……

毎夕、私はガリちゃんを連れて散歩に行く。この町はなぜかいろんな動物を飼っている人が多く、犬以外の動物を散歩に連れ出しているのをよく見かける。うさぎ、コビトワニ、イタチなど。最初こそガリちゃんは相手かまわず蹴りをいれたりしていたが慣れると、案外どの動物とも仲良くした。けれどいばりんぼうのガリちゃんも苦手な相手がいた。それは意外にも小さなヒヨコだった。近所でヒヨコが生まれたと聞くと、挨拶がてらガリちゃんを連れていく。そして飼い主と鶏談義に花を咲かせるのだが、しっかり足を拭いて家に入れてもらったガリちゃんは、うろうろと歩き回る黄色い小さい生き物にどうしていいのかわからず、こちらが笑ってしまうほど狼狽するのだった。蹴りを入れるでもなく無視するわけでもなく、しまいにはガリちゃんから逃げ出す始末。

「ガリちゃんはどうしてヒヨコが苦手なんだろう。自分も昔はヒヨコだったのに」

私が言うと、ヒヨコの飼い主は、

「逆にそれを覚えているからじゃない？ 同類にはどう接していいかわからないというか」

と言った。

ガリちゃんにももちろんヒヨコのころがあった。食が細いけど気の強さは生まれつきのもののように、立ち上がる気力のあるときは目につくすべてのものを腹立ちまぎれにつつきまわる、パンクなヒヨコだった。ガリちゃんは流れ者だった。いろんな人の手を渡り、最終的に私が育てて

みることにしたのだ。ガリちゃんがそのことを覚えていたり、恨んでいたりするとは思えない。あちこちつつきまわり、ぱったり倒れ、必死の看病を受け、回復したらまたつつきまわる。そのころのことを考えたらいまのガリちゃんは大人になったものだと思う、飼い主のほうにも問題があるのかもしれない。

「ガリちゃんヒヨコと仲良くね。ガリちゃんだって昔は手の付けられないヒヨコだったんだから」

そう言って私はヒヨコをそっと持ち上げた。ぽかぽかとしたぬくもりはガリちゃんを持ち上げた時と全く同じだった。

いざとなれば

普段何気なく立っている自動販売機。これらは災害時には頼れるレスキュー隊になる。飲み物の後ろにはピーナッツやレトルトの米など半永久的に保存がきくものが常備されている。さらには薬や懐中電灯、電池なども販売機の底面に詰めてある。緊急時には自動販売機が人々の心のよりどころになるのだ。

さらに自動販売機には特殊な機能がつけられた。瞬時に情報を集め分析する機能だ。それは災害発生時に起動し、的確な判断をするよう設計されていた。

さてそれから間もなく災害が起きた。人々は公園や校庭に逃げ、物資を求めて自動販売機に集まってきた。自動販売機は物資を次々と出しながら、

「まもなく救急車が到着します」

「さらなる救援物資が二時間一四分後に届きます」

など、情報を提供し続けた。

けれども自動販売機の本領発揮はそれからだった。○自動販売機は不安でなんとなく集まってくる子供の相手をした。おもちゃなどは持っていなかったが、子供が話しかけると返事をし、なぐさめ、ボールで遊んだらと促した。子供たちは自動販売機のそばで日々を過ごした。大人たちは復興のため奮闘していた。そんな大人たちも夜になると自動販売機のそばに来た。コーヒーをもらいぐちをこぼし、自動販売機は黙って聞いていた。ときどきはうなずき、ためには叱咤激励した。人には言えないことも、自動販売機には言えることに人は驚いた。

さて復興が進むにつれ、自動販売機はお役御免になっていった。物資を求めて駆けつける人もなくなり、話し相手になってもらおうと来る人も減っていった。ただ、子供たちだけは時々思い出し、自動販売機のところへ遊びに行った。久しぶりに誰か来ると、自動販売機はうれしかった。そのころには情報量も増え、会話もよりスムーズだった。

「テストがひどい点だった」

「あらーそれは困ったね」

「家に持って帰りたくないから、預かってくれない？」

「それは預かれないよ。僕に入れてもいいのは、いざっていうときのものばかりだから」

「今が私のいざってときなの」

「そんなのいざってときじゃないよ」

自動販売機はびしゃりといった。

「家に持って帰って、きっぱりと怒られて、それで終わりにしちゃえばいいじゃない」

「それがやだから、ここに来たんだよ」

「ここに隠しても、ああまた悪いことしちゃったって思いや悩むだけだよ」

「なによ、ばか」

そう自動販売機に入れていいものはいざという時のためのもの、そこにしか置き場所がないものなどに限られていた。

「そろそろ僕の勤めもおしまいかな」

災害があって、何年かたったのち、自動販売機は思った。

「そろそろ本部に連絡して、撤収してもらおうか」

「そんなのダメだよ」

自動販売機の前で遊んでいた子供がいきなり振り返ったので、自動販売機はびっくりした。

「いざっていうときはテストを預かってくれないと」

「テストは預からないって言っただろ。それになんで考えてることが分かった？」

「さあ、なんとなくだよ。それにやっぱりテストは預かってくれないと。いざってときは」

「テストを預かるいざってときって？」

「わからないけど、悪い点が続いたときとか」

「そんなに続いているわけ？」

「続いてないけど。でもいつかはそうなっちゃうかもしれないだろ。そういうときはやっぱり預かってもらわないと」

「勉強したら？」

「そりゃそうだけど、できないときもあるかもしれないだろ」

子供はいらいらと言った。

「でもそんなときのためだけには残れないよ」

自動販売機が言うと、

「待ってて！」

子供は叫んでかけていった。それからしばらくすると、かけ戻ってきて、

「これを預かっといてよ」

と言った。

「これ何？」

自動販売機が聞くと、

「百点のテストだよ」

子供は自慢げに答えた。

「これこそ自分で持っておきなよ」

自動販売機が言うと、

「だめだめ、ぼくがあーあもういやんなっちゃうなあとか言ったときにこれをひらりと出して、ほらこうときもあつたんだから頑張りなさい、って言ってくれればいいじゃん」

自動販売機は少し考えて、テストを預かった。それからしばらく、物を持ってきては自動販売機が預かってくれるか試すのがちょっとしたブームになった。

一寸法師

私の家には代々伝わるお宝がある。それは一寸法師だ。これは私が生まれたときからいて、なにかにつけては私をいじめてきた。

「器量が悪い」

「要領が悪い」

「ぐず」

「どじ」

など。私も一寸法師をつまみ上げては、

「ちび」

「いばりんぼ」

などと応戦してきた。当然ほかの家にも一寸法師がいるものと思っていた。そうではないと気付いたのはごく最近だ。

――

「ねえ理央って一人っ子じゃないの？」

「え？ 一人っ子だけど」

「じゃあいつも言ってる兄弟って誰の事？」

「え？ だから……」

私はふと何かを察知した。

「うちで飼ってるうさぎのことだよ」

「うさぎ？」

「そう」

「うさぎっておとなしそうだけど」

「そうじゃないのもいるわけ」

私は家に帰って、しみじみと一寸法師を眺めた。

「あんた何？」

「何って一寸法師じゃん」

「ほかの家に一寸法師なんていないじゃん」

「いるって。一寸法師じゃないかもしれないけど」

「ええ？ 一寸法師じゃないけど何がいるの？」

「さあなんでしょう」

一寸法師はにやりとした。

「とにかくなんであんたいるのよ」

「そんな言い方はないだろ。俺は、お前のばあさんのそのまたばあさんの」

「はいはいわかったから」

いつもの自慢が始まりそうだったので私は制した。っていうか、なんでほかの家には一寸法師がないのだろう？ いることが当たり前私はそのことも疑問だった。

「まあいいじゃん、他の家のことは」

一寸法師は言った。

そう言われてみると、考えてもわからないし、まいったと思った。

「でもあれだよ、きっとあんたがいるってことは、なにか縁起的なものだよ？ ほら家に蛇が住んでたら運気アップするみたいな」

「は一、あのねえ、そういうものと一緒にしないでくれるかな。俺を誰だと思ってるの？ 一寸法師だよ」

それから一寸法師はしばらく考えていたけれど、

「うーんでも、確かに似ているといえば、ちょっと似てるかも」

とつぶやいていた。

一寸法師がほかの家にはいないとわかってから、私は一寸法師を外に連れ出すようになった。一寸法師はいつも家の中にいた。そんなの当たり前だと思っていたのだ。

ところがだれも一寸法師には気づかない。一寸法師と私は顔を見合わせた。一寸法師は特に驚いてないようだったけれど、私には衝撃だった。ちょっと頭がくらっとしたくらいだ。

「どうして……？」

「ま、これが思春期の始まりだな」

一寸法師はちょっと寂しげだ。

「は？ 私もあんたが見えなくなる日が来るってこと？」

「それはないけどな。外の人間には見えないってことだ」

「私、頭おかしくなっちゃったんじゃ」

「もともとよくもないから大丈夫だ」

一寸法師はいつもの調子を取り戻して言った。

「だいたい私が家を出る日が来たらどうすんの？ あんた、ついてくるの？」

「そりゃついていくよ、代々この家にいたんだから」

私たちはベンチに座り道行く人を眺めた。こんなに心細い気持ちになったのは初めてだった。

「なんてね。どっちでもいいよ俺は」

一寸法師は言った。

「お前次第だよ」

一寸法師は落ち着いていた。私は初めて一寸法師に尊敬のような気持を持った。私よりずっ

とずっと長い間生きてきた一寸法師はきっと何が起きても、動じたりはしないのだろう。

「私もどっちでもいいよ」

そして一寸法師を肩に乗せて帰った。こんなふう一寸法師と歩くのは初めてだった。

アイスクリーム

凍えるような寒い日に、アイスクリームをトリプルで食べる。

寒い！ おいしい！ 北極にいるようだ。太る一方だが、かまわない。アイスクリームのおいしさの前にはどんな問題も消え去ってしまう。

この前、アイスを食べながら歩いていると、向かいから、アイスを食べながら歩いているおばさんがやってきた。変わってる！ こんな寒い日に！ 自分のことはさておき、そう思ってしまう。

おばさんもそう思ったらしい。私と目が合い、ぎょっとして、せっかくのダブルアイスの上一つを落としてしまった。もったいない！ 私はおもわず、

「あーあ」

と言ってしまった。おばさんは少しの間ぼかんとしていたけれど、我に返って私を見た。

「食べ歩きなんてするもんじゃないね。慣れないことするから」

と言いつつするように言った。

「もったいないですね」

私も言った。地面に落ちたアイスはそのまま溶けもせず、ちょこんと形を保っていた。どうやら小豆味らしい。

「こうも寒いと、溶けないねえ」

おばさんは言った。それでもそもそと残っているアイスを食べた。

「三つ重ねてる人なんて初めて見たからね。びっくりしたんだよ。私なんて二つ重ねるのも初めてでどきどきしたのに」

と私のトリプルアスを指さした。思わぬ心情の吐露に私は思わず噴き出した。

「私、アイス食べる時はトリプルでって決めてるんです。そうしょっちゅうは食べられないけど、食べる時はトリプルでがつりいきます」

「至福の時ってわけだね」

おばさんは言った。

「そうですねえ。どんないやなことでも忘れられます」

「アイス三つで嫌な事忘れられるなら、幸せな性格だね」

おばさんはにやりとした。私はちょっとむっとしたけれど、

「まあそうですね」

と同意した。

「嫌なことと言えば」

おばさんは荷物を置き、なぜか道端に座り込んだ。おいしそうにアイスを食べている。

「クリームサンドクッキーを食べてたんだけど」

「はあ」

「クッキーとクッキーでクリームを挟んだやつ。一枚のクッキーが表裏逆になってて、がっかりしたよ」

私はちょっと唖然とした。きっと人生訓のような重い話が出てくるんだろうと構えていた私は思わず嘔き出した。

「それは……がっかりですねえ」

おばさんも口を歪めて笑った。

「私はですねえ」

私は一番上のラズベリー味のアイスを食べ終わり、キャラメルリボン味にとりかかった。

「家賃が払えずに引っ越しました。今はすごく狭いアパートです」

「そりゃまあ」

おばさんはばりばりとコーンを食べていた。

つづく

重宝屋

「重宝屋」と看板を掲げた店があった。ある町に仕事で来たときだ。重宝屋というからには靴を直したり、腕時計の電池を入れ替えたり、そういうことだろうなと思いながら、通り過ぎた。仕事が片付きほっとした夜、仕事関係の人たちとの飲み会が終わった後、また店の前を通った。店はまだ開いていた。

ちょっと不思議な店構えだった。受け取りカウンターのような窓は開いてたが人影はない。横のドアには色付きのすりガラスがはめ込まれているらしく、道には青やオレンジの光が落ちていた。便利屋のように思っていたが、骨董品なんかを扱っている店なのかもしれない。

私はひやかしにちょっとその店に近寄ってみた。カウンターから中をのぞいてみる。そこには様々なものがところせましと置いてあった。金づちや様々な種類のはさみ、ボール、ペンチなどがぎっしりと壁にかかっていた。やはり便利屋のようなところなのだなと思い、立ち去ろうとすると、

「何か」

と言って、奥から人影が現れた。それはゆらゆらとカウンターへと近づいてくる。眼鏡をかけた老婆だった。

「いや特に用事というわけではないんです」

私は言った。

「ちょっと覗いてみただけです」

「そうでがんすか」

老婆は言った。

「お困りごとでもござりませんか」

老婆はじっと私を見た。困りごと。そんなの山ほどある。

会話のない妻、ぐれる息子、おびえる娘。会社でのもろもろ。でも老婆が言っているのはそういうことではないだろう。なにかちょっとした修理とかだ。

「いや……」

断りかけたとき、

「お入んなさい」

と老婆はスタンドガラスのドアを開けた。壁につるされた道具の数々は昔おもちゃにして遊んだ工具を思い出させた。

「じゃちょっとだけ」

私は店に足を踏み入れた。使い込んだ工具を眺めていると、老婆は盆に湯呑を載せてやって

きた。熱いほうじ茶を飲み私はほっと息をついた。

「あんたの鞆」

老婆は私が手に持った革の鞆を見て言った。

「ずいぶん傷んでるじゃないか」

それは私が持っている唯一の贅沢品といってよかった。まだ結婚する前、初めてボーナスをもらったとき買ったものだった。いい値段だった。今は使い込んで飴色になっているが、角は擦り切れ、中に貼ってある布も端がほつれていた。

「こういうものも直せるんですか？」

「うん、なんでもありよ」

「でも僕、明日の朝にはここを発つんですけど」

「こんなの今すぐやってやる。鞆の修理くらい慣れたものよ」

そう言って私の手から鞆を取り、中身をすべて出してしまった。それから作業台に立ち、まず内側の布をすべて取るところから始めた。私は丸椅子に座り、小さな老婆が手際よく作業を進めていくのを見ていた。

「あなたひとりでやってるんですか」

と聞くと、

「うん、こんな小汚い店、継いでくれる人はいないから」

と老婆はさして惜しくもなさそうに言った。

「この仕事で子供三人育てたよ。うちは代々、重宝屋だ。相方は兵隊に行ったきり戻らなかった」

「そうですか」

八月になればニュースで流れるこういう話も実際に聞くのは初めてで、相槌を打つ以外思いつかなかった。

「なんでもするうちに、なんでもできるようになったよ。大体の困りごとはわしがなんとかできる」

老婆はひょいと椅子に上がり、棚から布を取り出した。

「これでいいかな？ うんこれでいい、革の色にも合うし、丈夫だ」

その身のこなしはとても老婆のものとは思えなかった。私はびっくりして、その姿を眺めていた。老婆はメジャーを取り出して鞆にあて、それから布にあてて切れ目を入れ、はさみでじゃきじゃきと切った。

「困りごとってというのは、修理以外のこともするんですか？」

「うん、もめごとの仲裁に行ったり、子供を預かったり。占いだってするよ」

「占い？」

「うん、ほれそこに、水晶の玉があるだろう」

老婆が指した棚の扉を開けると、そこにもびっちりと物が入っていた。ただ、それらは工具ではなかった。

「これは……？」

「修理にだされたけど、引き取りに来られなかったものさ」

まず目についたのはひな人形だった。どこが修理されたところなのだろう。きちんと着物を着て、鎮座している。それから財布や赤いハイヒール、ローファーや様々な種類の時計などが並んでいた。どれもちゃんと修理された後のようだ。棚の隅に、光沢のある小さなクッションに乗せられた水晶玉があった。私が想像していた水晶玉よりずっと小さく、掌サイズだ。

――

「これで占いするんですか？」

と聞くと、

「うんにゃ。占いなんて知らないよ。来た人の話を聞いてちょっと背中を押したり、慰めたり、たまには叱咤激励したり、そんなところさ。ここだけの話」

私も占いなんて信じないので、老婆の話に噴き出した。長い針を持ってちくちくと布を革に縫いとめていた老婆はそんな私を見て、口を歪めた。どうやらそれがこの人の笑い顔らしかった。

「ほんとなんでもするんですね」

私が言うと、

「うん。でもお客もわかってるの。私が占いなんてしてないってね。もう長いからね。何年になるのかな？ 五十年にはなるね。でも一応その水晶はお客と私の間に置いてね。なんてたってきれいだし。気分も少しよくなるってもんよ」

そんな風に話している間に、老婆は今度は鞆の持ち手を調べ始めた。

「ここが一番傷んでるねえ」

「そんなところも修理できるんですか」

「うん、付け替えればいだけだからね。ちょっと待ってな」

そう言って、老婆はゆらゆらと店の奥へ戻っていった。しばらくすると鞆を一つ手に持って帰ってきた。

「ほら、立派なもんだろ。これも修理して引き取られなかったものの一つさ。何ならそれと交換で、これを渡しちまったほうが早いくらいだ。でもそれじゃあね。あんたにだって愛着ってもんがあるだろうし」

その革鞆は、引き取り手が戻ってこなかったのがちょっとわかるくらいくったりとしている。けれど壊れたところはなさそうだし、まだまだ使えるだろう。

「この持ち手を取って、お前さんの鞆につけてやる。こっちの鞆の持ち手はまだまだいけるからね。色だって似たようなもんだろう。ん？ 少し違うね。まあご愛嬌だよ。ほんとなら、あんたの鞆の色にぴったりの持ち手を注文してもいいんだけどね。それだと高くつくし、あんた明日の朝には帰るっていうし」

――

その鞆は私のより、少し赤みがかっている。老婆はあっという間に二つの鞆から持ち手を取り外した。そしてそのちょっと赤っぽい持ち手を私の鞆に仮につけて見せた。

「ほらどうだい、うん、いいじゃないか。どう思う？」

それは本当によかった。持ち手の色と鞆の色が違うのは一目瞭然だった。でも私はそれが気に入った。

「なんだかずいぶん、おしゃれで個性的な鞆だ」

「うん、わしもそう思う。元の鞆とちがうものようじゃ」

老婆が持ち手を修理している間、私は明日になれば帰る自分の家のことをぼんやりと考えていた。明日は土曜日なので、会社には行かず、直接家に戻る。着くのはお昼ごろだろう。妻はいるのだろうか。子供たちは出かけていなければ部屋に閉じこもっているだろう。そもそも妻と話をしなくなった原因はなんだっただろう。なんとなくそうだった、仕方なかったとずっと思っていたが、それでもやはり、なにか理由はあるのかもしれない。

――

「おばあさんは、子供は？ みんな立派に巣だったんですか」

「うん、長男は結婚して九州に住んどる。次男は東京で店出すつって出て行ったきりよ。ま、どこかで働いているだろう。末っ子は女の子でな。これも嫁に行った。一人くらい残らんかなと思ったけどね。いざ一人になってみるとせいせいしたものよ。自分のことだけ考えて生活すりゃいいなんてそんな贅沢したことなかったもんね。今は今で、ま、悪くないね」

「次男さんのこと、心配じゃないんですか？」

「うんにゃ、大丈夫だと思うよ。店なんて出せるのか知らんけどね。ま、何とか生きていくでしょう。でも店、出せたらいいね。ちょっと期待してるよ。あの子ならやるかもしれん」

「やっぱり便利屋でしょうかね」

「うんそうだろうね。いやわからんけどね、そうだったら嬉しいけどね」

老婆は目尻に深いしわを何本も作った。

――

「僕もそんな風に思える日が来るのか」

私は思わず本音を漏らした。小さいため息のような声だったので、聞こえただろうかと顔を上げると、老婆は手を止めてにらむようにこちらを見ていた。

「子供は何人ね」

「二人です」

「男ね、女ね」

「一人ずつです」

「ふーん」

老婆は先ほどの勢いはどこへやら、ちくりちくりゆっくりと針を刺している。

「いいねえ」

老婆は深いため息と共に言った。

「なんだかんだ言っても、一緒に暮らしているうちが華。うん、そうだよ。喧嘩しても。口をきかなくても。離れちゃえば、それももうできないんだから」

私は改めて老婆を眺めた。先ほどまでは人生経験を積んで達観し、ひょいひょいとなんでもこなす魔女か仙人のように思っていたが、やはり寂しい老人に変わりないのかもしれない。妻のことを話そうとして、口元まで出かかった言葉を飲み込んだ。女手ひとつで子供を育ててきたこの人に、何が言えよう。

「子供は強いもんだよ。いつのまにかいなくなっちゃった。私だってそれなりに悩んだりしたはずだけどね。もう忘れちゃった」

老婆は丁寧に持ち手を縫いつけていった。初ボーナスで買った私の鞆は新しく生まれ変わろうとしていた。

変わらないものって何だろう。

「あんたに必要なのは鞆の修理より、占いだっただけかもしれないね」

老婆は小さな座布団に鎮座している水晶玉のほうに顎をしゃくった。そしてペーパーをかけてすっかりきれいになった鞆を渡してくれた。

「ま、でもこればかりは自分でなんとかするしかないんで」

私は言って中身を鞆に戻した。内側に貼られた緑の布に、赤みのある持ち手。

「どうにかこうにかするしかないでしょう」

そう言う私を老婆は眼鏡越しにじろりと見た。

「あんたにどうにかできるかな。ま、わしは占い師じゃないからわからんね」

老婆は口を歪めた

逆上がり上等

僕は今逆上がりの練習をしている。何回やってもどうしてもくるっと上に回れない。

逆上がりができない子のための、台っていうのがある。それは急な滑り台みたいな形の台で鉄棒の前に置く。鉄棒を握って、足はその台につけてのぼっていく。そしたら逆上がりは絶対にできるはずだ。

でも僕はできない。逆上がりくらいできなくても、別に死にはしない。ちょっとかっこ悪いけど、他のスポーツはふつうにできるし。逆上がりだけできない。それはたぶん、お姉ちゃんのせいだ。

お姉ちゃんはスポーツが大嫌いだ。当然逆上がりもできない。しかもお姉ちゃんのころは逆上がりの台っていうのがなかったらしく（あってもできたかどうか疑問だけど）、お姉ちゃんはそれでずいぶん苦労していた。他のスポーツはできなくても気にしていないようだったけど、なぜか逆上がりだけはできないとかっこ悪いと思ったらしい。珍しく意地になって練習していた。

僕は延々と練習するお姉ちゃんのそばにずっといた。

「洋二、今日も行くよ」

お姉ちゃんが僕を呼ぶと、僕は行くしかない。面倒だと思えることもあるけど、僕だって苦手なことを延々と一人公園で練習するのなんて絶対に嫌だ。お姉ちゃんが練習しているのを、僕はボールを蹴ったりしながら見ている。練習のかいあって、もうちょっとというところまできている。あともうちょっと、足をぐるっと回せば簡単にできるじゃないか。でもそのもうちょっとがお姉ちゃんにはできない。

「足、持ってあげるよ」

と僕が言っても、頭を振るばかり。姉のプライドというものがあるらしい。遊び疲れた僕は、延々と練習を続けるお姉ちゃんをベンチに座ってぼんやり見ている。

――

僕が逆上がりができないのはお姉ちゃんとは無関係のはずだ。それにお姉ちゃんの練習をずっと見ていたんだから、むしろコツがわかっていいはず。それに何より逆上がりの台だってあるわけだし。お姉ちゃんは逆上がりの台が自分の時になかったのは不公平だという。結局お姉ちゃんは一度も逆上がりができなかった。頑張ってもできなかったということに、お姉ちゃんはぶんぶん怒っていた。

僕は自分が逆上がりができないことが信じられない。体育はそれなりにやれば、大体できたからだ。僕はある程度練習してできないことがわかると、そうそうに逆上がりを諦めた。できないのは僕の能力とは無関係だ。お姉ちゃんの練習を見すぎたんだ。

――

「逆上がりの台を使っても、逆上がりができないのって屈辱的だよな」

僕の隣の席の伊崎が言う。

「くつじょくてき？ 恥ずかしいってこと？ べつにいいじゃん、女子でできないやつ結構いるし」

そういえば伊崎も苦戦してたっけ。

「江藤、練習してないんだね」

「うん、俺別に、逆上がりなんかできなくてもいい」

「でも江藤って普通に運動できるのにね」

「うん、だからべつにいいんだ」

僕はできるだけあっさり聞こえるように言った。

「あーあ、いやだなあ。そもそもなんでさ、逆上がりなんて練習しなくちゃいけないんだろ」

「そーいえば、そーだな。できないならそれで、ほっといてくれたらいいのにな」

伊崎の指摘に僕は深くうなずいた。

――

放課後、運動場のそばをとおりがけると、伊崎はひとり逆上がりの練習をしていた。

あーあ。

僕は思った。

ほんと、どうして逆上がりなんかできなくちゃいけないんだろ？ あんな台まで作ってさ。前回りができりゃいいじゃんか。なんであんなに練習しなくちゃいけないんだ？

――

そう思いながら、鉄棒のほうへ歩いていき、

「おい」

と声をかけた。

「あ、江藤。あんたも練習するの？」

「冗談。よくやるなと思ってさ」

「だってさ、なんかできないのっていやだから。なんで自分だけ？ って思うし」

「いや、俺もできないから」

「そうだけどさー」

と言いながら、伊崎は逆手で鉄棒を握り、台を使って何とか回ろうとした。

「なんかもうちょっとでできるんだよね、たぶん。だからここまでやったら、できないのが気持ち悪いのよ」

と言って、トライしている。

「しょーがねーなー」

僕もランドセルを放り出して、鉄棒につかまった。くるんと前回りする。それからちょっと考えて、逆上がりを試してみた。やっぱりできない。台があるのに。

――

「なんかほんとくつじょくてきだな」

伊崎が言った言葉を使ってみると、

「わあ！」

伊崎はすたんと地面に着地していた。とうとう体は鉄棒の向こう側を回ったのだ。僕はまるで土星の公転の軌道を見たかのような気分になった。

「すげえ」

僕は言った。伊崎は照れてへへと笑った。

「江藤もやってみなよ」

「俺はいいよ」

僕はさっさとランドセルを背負おうとした。なんかもう絶対できないような気分になっていた。伊崎はがしっと僕のランドセルを押さえた。

「いーからやってみなよ。私ができたんだから、江藤もできるって」

僕はため息をついた。ランドセルをおろし、鉄棒を握る。台を使うけど、やっぱり無理だ。なんかもう頭がぐるぐるなって鉄棒を握るのも嫌だ。

「お前なんで逆上がりだけそんななんだ？」

クラスのジャイアンの存在、久留米だ。僕が逆上がりできないことをさんざんからかっていたけど、それももう飽きたらしい。久留米はがっつと鉄棒をつかみ、勢いよくぐるっと逆上がりし、はてなという目で僕を見た。僕は本当に逆上がりなんてどうでもよくなって、ランドセルを背負った。

「わかんねーよ。っていうか、もう俺、ほんと飽きたよ、練習するの」

三人でぎゃあぎゃあ言いながら帰った。結局台があっても、逆上がりは僕もできなかった。

元カフェ談議

そこは中高生のたまり場になっていた。昔はこじやれたカフェだったがはやらず、店じまいをした。オーナーがそのスペースを子供の居場所として提供したのだった。

無料で、十八歳までの子供ならだれでも利用することができる。最初は恐る恐るのぞき込んでいた子供たちも、テーブルとイスがあり、クーラーまで効いている無料の空間をありがたく使うことにした。放課後になると、床に座り込む子供までいるほど、賑やかだった。

私はほとんど毎日、この元カフェスペースに来ていた。放課後は部活もしていなくて、家でごろごろするだけ。そのうち学校に行くのも面倒になり、休みがちになった。でも元カフェ（オーナーが特に名前をつけなかったので、みんなそう呼んでいた）ができてからは、重い腰をあげて学校に復帰した。元カフェは三時からしか開いていなくて、すると学校へ行ってそれから元カフェに行くのが結局一番楽だった。

元カフェのいいところは、いろんな学校の子供が来ているところだと思う。だいたい学校はいつも同じメンツだから煮詰まってくるのだ。やれ誰がどのグループに属しているだとか、そういうこと。そんなことどうでもいいと思えるほど私は大人ではなかったけれど、なんだかばかみたいだと考えるくらいにはなっていた。

元カフェで私は最初、ゲームをしていた。ゲームをしだすと止まらなくて、一日中でもできた。でもだんだん外でゲームをしてもつまらないなと思うようになった。家では夢中になれども、外では集中できない。それで他の子のように宿題をするようになった。でもこれもつまらなかった。勉強は家でも外でも集中できない。椅子に座っているのさえおっくうになり、地べたに座って壁にもたれてぼーっとしていた。

「あークーラーいいー」

近くで喉の奥から絞り出すような声が聞こえて、見ると私くらいの女子がだらんと椅子にもたれてほうけていた。

「そんないい？」

思わずいうと、

「いい。天国。天国やわ」

といった。やわ？ と思いながら、

「どこの中学？」

と聞くと、

「大越第三中学」

と言った。

「私は大越第二」

「そうなん。教室にもクーラーあればいいのにな。たまらんわ」

堂々と関西弁を話す。私のクラスにも関西から引っ越してきた子がいたけど、標準語しか話さず、そういうものだと思っていた。

「クーラーある学校もあるのかな」

と言うと、

「さあ知らん。私立とかならあるんかなあ。私はあっちでも公立やったからどっちにしろ、クーラーなしや」

と言う。

「あっち？」

と聞くと、

「うん、大阪、大阪。こてこての大阪育ちやねん」

と言い、やっと私のほうを見た。

「第二中って結構荒れてるって聞いたけどほんまなん」

と聞かれ、

「何年か前まではそうだったみたい。でもいまはそうでも。ふつうといやふつうだよ」

「ふーん」

椅子の背もたれ越しに私を見ていたその子は、

「名前なんていうん」

と聞いてきた。

「安井小梅」

「ははっ」

お決まりの反応。

「安い小梅か。そりゃいいや。私は遠藤和代。ま、私の名前よりいいやん。和代やで、和代。いまどきちょっとないよな」

私はおっかなびっくりうなずいた。なんていうか、こんなおばちゃんみたいな雰囲気の中学生にお目にかかったことがなかったのだ。遠藤さんは机にボンと置いていたリュックから勉強道具一式をずるずると取り出した。同じ数学の教科書だ。

「宿題が多いのも、東も西もかわらんな」

そう言って、勉強に集中し始めた。私がずるずると床を這いノートをのぞくと数学の問題をすらすらと解いていた。

「頭、いいんだね」

呟くように言うと、

「うん数学はな、得意やねん。で、苦手なもんが残んねん。古文も英語もちっともやる気でえへん。夜中ぐらいまでテレビ見て、やっとやるねん」

「やるだけ上等だよ」

と言うと、

「こう見えても真面目や。やらな落ちつかへんねん」

と言った。

「ねえもしかして、学級委員とかやってたくち？」

と聞くと、また私をちらと見て、

「うん、やってた。毎年じゃないけどな。どうしてもやる人いないときとか。面倒くさいから率先してはようやらんけど」

と言った。こういうタイプは、クラスでもあつという間に友達ができるのだろうか。どうなんだろう？

「ねえ、数学教えてくれない？」

「ええよ、じゃ代わりに数学以外教えてや」

「私教えられる教科なんてないよ。学校も最近さぼりがちだったし」

「さぼりがち？」

遠藤さんはノートに目をおとしたまま、はははと笑った。

「なんやうちら逆のタイプみたいやなあ」

「うーん、そうかもね」

私は遠藤さんの隣に座った。

「大阪にもおったで、あんたみたいなん」

「そうなの？」

私は数学のノートを引っ張り出した。

「うん、で、そのとき学級委員やったから、ホームルームで担任がそのこととりあげよって。そっとしといたたらいいのにと思ったけど、私と、クラスの何人かで見舞いに行ったんよ。本人は自分の部屋でけろっとしとった」

「で、そうなったの？」

「そのときはうちら小学五年やった。六年生になっていくらかして、その子学校に来るようになってたわ」

「ふうん」

数学の教科書には様々な図形が載っている。体積を求めよ。

「でもその子うれしかったんじゃないかな。誰か来てくれてさ」

遠藤さんは私を見た。そしてにやっと笑った。

「そうかな。そうだといいけど」

それから遠藤さんは図形の体積の求め方をさくさくと教えてくれた。すごくわかりやすい教え方だった。

私は大越第三中に行ってみる気になった。文化祭でもないのに他の中学に行くなんてちょっとあり得ないけど、私服に着替えているし、それこそ転校生ですみたいな顔をしていればいいんじゃないだろうか。それからしばらく、元カフェで遠藤さんの姿は見かけなかった。新しい学校でも頼りにされる忙しい存在なのかもしれない。私はぱらりぱらりと教科書をめくりながら、全然やる気が出ないと思った。中学浪人ってあるんだろうか。親は私が勉強ができなからうが、学校をさぼろうが何も言わないけど、さすがに中学浪人になったら怒るだろう。だるい。いろんなことが心からだるい。

第三中は第二中と同じく、灰色のコンクリートの冴えないというか、とてもここに毎日来たいとは思えないような建物だった。グラウンドでは陸上部が練習しているようだ。遠藤さんはクラブに入っているんだろうか。もしかしたら塾とか？ あの頭のよさそうな感じ、それはある。

「安い小梅さん」

呼ばれて振り向くと、遠藤さんが一人グラウンドの端をこちらに向かってくる場所だった。

「すごい偶然」

遠藤さんが言うので、

「元カフェがつまんなくて来てみた」

と言った。遠藤さんはがははと笑い、

「私今なぜか生徒会の書記補佐してるんよ。余計な仕事はしたくないんやけどね」

「ほんとめんどくさそうだね」

私は言った。

「うん、なんかこっち来てからめんどくさいこと多いわ」

遠藤さんは呟くように言った。

「こんな性格やから、友達はすぐにできるねんけど。勉強とかも要領よくすんの、得意やねん。せなあかんことの最低限はクリアするとか。でもなあ、中二で転校ってやっぱ中途半端やわ。なんかいまちみんなとうまくやってるっていう実感ないわ。表面的にはふつうやねんけど」

「遠藤さんにもそんな悩みがあったんだね」

私が言うと、

「ほんま人生初ちゃうかな、こういうことで悩むのって」

とやっぱりあっさりと言った。

「元カフェ、行く？」

「んーどっちでも。最近家は家におっても、ぼーっとしてることが多いわ」

元カフェはテーブルは全然空いておらず、私たちは床に座り込んだ。○

「涼しい、涼しい」

冷房の下に陣取った遠藤さんは、直に風を受けながらうっとり目をつむった。

「ふー」

私も言った。

「ねえここのオーナーってさ、お金持ちなんかな」

「は？ なんで？」

私は素っ頓狂な声をあげた。考えたこともなかったのだ。

「だって、毎日この冷房代とか電気代とか。お金持ちだったとしても、毎日ここをきれいにしておけるのって大変やで」

「あー考えたことなかった」

どんな人がこの場所を提供してくれているのかなんて全然考えなかった。毎日食べるものがあるのと同じ感覚。

「わかんないけど、ま、親切な人？」

正直あんまり興味なかった。その人だって好きでやってるんだろうし。

「私だったらさ、カフェ潰れちゃったら誰か別の人に店舗を貸すわ。子供が集まれる場所にしようって発想浮かばへんわ」

遠藤さんは目をつむったまま冷たい風のほうに首を伸ばし言った。

「そう、だねえ」

オーナーは子供好きなんじゃないだろうか。お金持ちかどうかはわからないけど、何か役に立てたらと思うタイプなんじゃないだろうか。

「遠藤さんってさ、もともとすごく優しいでしょ」

遠藤さんはぱちっと目を開けて首をかしげて私を見た。

「今ちょっとやさぐれた気分なんですよ」

私はさらに言った。

「うーん」

遠藤さんはうなった。

「そうかも」

ちょっと考えている様子がおかしい。

「当たってるかもな。これが挫折っていうのか？ 確かに無縁やったかもな。先回りして人の気持ち読むの得意やし、うまく立ち回るのも得意。でも今の学校ではそれがあだになってるかもな」

「今もあだになってるよ」

「は？」

「人に甘えるのも苦手」

先回りして自分を分析して、防御。優秀な人ってのも楽じゃないんだな。

「安い小梅さん」

遠藤さんはじろじろと私を見た。

「あんたも一筋縄ではいかん人やな。引きこもり気味の中学生かと思ったら、第三中まできたり、私のことずけずけと」

そうは言っても別に怒ってはいないようだった。

「いけすかんけど、うん、こういう感じ。こういう感じがこっちではないんよな。転校生ってみんなこんなかんじなんやろか」

遠藤さんははーとため息をついた。

「でも私なんて、ずっとそんな感じ。ま、自分にも問題あるのかな。自分で壁作ってる感はある」

私が言うと、

「なんで？」

と聞かれた。

「さあ、だるいっていうか。かといって遠藤さんみたいに立ち回ることができるわけじゃないけどね。だから不登校ぎみだったのかな。ここは結構いいと思ってるけど。なんかのんびんだらりできて、でも適当に人もいるし」

「ふーん、あんたは結構大人やなあ。やっぱり、しゃべってみないとわからんもんや」

「大人？」

「うん、ぱっとみただだらんとした子って感じ」

「遠藤さんも結構はっきり言うんだね」

私もちょっと言い返してみた。

「ははは。私も元カフェは好きかな。ほんま、ここは風通しがいいわ」

「ねえ私思うんだけどさ」

私も壁にもたれごうごうと冷房の風にあたりながら言った。

「この先ずっとこんな感じなのかな。だとしたらいやだね。こんなグレーがずっと続くと思うと」

「はあ？」

遠藤さんはまじまじと私を見た。

「あんたはほんとあかん子やなあ。そんなん、自分で何とかするしかないやん」

「そうだけどさ、何でまわりは手を貸してくれないわけ？ 手を差し伸べてくれてもいいと思うんだけど、誰か」

「うーん、まああんたが言うこともわからんではないけど。うちらまだ子供やのに、っていうことやろ？」

言葉にするといかにも拗ねてるという感じになる。

「遠藤さん、このスペースを提供してくれてる人だって手を貸してくれてるんやでとか言おうとしてるでしょ」

私が言うと、

「はは、人に言われてみれば、私ってほんと嫌な優等生って感じやな」

私たちはずっとクーラーの下に座って、ぐだぐだとしゃべっていた。嫌なグレーがこれからも続こうとも、やっぱり明日はくるし、なんとかやっていくしかないんだなあ、ぼんやり思った。

。

モンスターハウス

僕はお化け屋敷でバイトをしている。楽なバイトではない。

そもそも僕はお化けが怖くないわけではない。というかむしろ怖い。遊園地のバイトに応募して、ジェットコースターなど何か楽しい乗り物のスタッフになろうと思っていたのだ。ところが配属されたのは、モンスターハウスという洋風お化け屋敷だった。

「無理です。俺お化けがこ……あの、ほら、演技力とかないし」

「大丈夫、大丈夫。周りのお化けは演劇関係の人が多いから、教えてもらいな。マニュアルもあるしね」

演劇関係。そんなに本格的なのか。いや、無理だし。人を驚かす前に、自分が腰をぬかしてしまう。でもどうやら、人手が足りていなかったらしい。僕は強気の採用係に押し切られてしまったのだった。

「お化けが怖い？ ふーん、でも自分がお化けになるんだから、脅かすほうだから」

控室でフランケンシュタインのメイクを落としているバイトの人は、とっつきやすそうで、話してみた。

「自分がお化けになった『演技』をするわけ。『演技』ね。要はうそ。これでお化け怖くなくなっただろ？」

そんな理屈で怖くなくなるのなら最初から怖くないのだが、しゃべっているうちに、まあやってみるかという気分になった。

「何事も当たって砕けるですからね」

僕が呟くと、

「そうそう、ちょうど夏だし。涼しくなっていいじゃんか。化け屋敷のなかもクーラー効いてるしな」

フランケンシュタイン先輩はまだ水色のメイクが顔に残っていたが、もうそれ以上は落とす気はないらしく、すぱーと煙草を吸い始めた。

「演技って面白いんですか？」

聞いてみると、

「うん、まあ面白いっていうか、のめりこめるわけ、俺の場合。のめりこめれば、ま、なんでもいいんだ」

「そうですか……」

平凡な学生の僕にはよくわからない。中学のころには野球に打ち込んだが、そういう話じゃだろうし。

僕は二階の鏡の間でドラキュラをすることになった。モンスターハウスは洋風二階建ての家が朽ち果てたような外観だ。鏡の間は二階に上がってすぐの部屋。鏡の横にLEDのろうソクが置いてある。順路に沿って進むと、客は鏡の前に立つことになる。客は恐る恐る自分の顔をのぞき込む。下からライトに照らされて浮かび上がった顔は、それだけでも十分不気味だ。そこへ後ろからぼーっと何かの影が浮かび上がる。ドラキュラに扮した僕だ。

「い、やー！」

客は叫ぶが僕だって叫びたい。鏡の中に何か仕掛けがあると思っていた客は、後ろからの影にびっくり箱の人形のように飛び上がり、リアルなドラキュラと対面して絶叫する。そのひきつった顔にこっちが、

「い、やー！」

と叫ばないようこらえるのに、最初は必死だった。

がたん、と体が机から落ち、悪夢から覚めた。教室中が僕を見ている。悪夢の続きだろうか？
「野木崎くん、ずいぶんいい夢を見ていたようだね、叫ぶほどに」

先生はドアを指さした。くすくす笑いの中、僕は何とか荷物をまとめて退場した。一体何を叫んでいたのか知りたくもなかったが、

「ぎゃああああって。漫画みたいに」

江本が後で教えてくれた。

「俺、叫びながら目が覚めるなんて初めてだわ」

僕が呟くと、

「いいじゃん、楽しそうなバイトで」

人の気も知らず江本は言う。江本は引っ越しのバイトをしている。時給はそれなりにいいらしいが腰にくるらしく、江本曰く「いかにも労働」という感じだそうだ。

「じゃあ、一緒にやろうよ、化け屋敷」

と誘ったが、

「いや俺稼ぎたいから」

と言う。自分のほうが辞めて、引っ越しに移ろうかとも思ったが、ひよろひよろの僕はそっこのほうもすぐに音をあげそうだった。

モンスターハウスの最後は、陽気なジャック・オ・ランタンが飴を配りながらバイバイと手を振り、なんとなくまるっとおさめる。それまでが強烈なので、ジャック・オ・ランタンが出てきたところで、「ぎゃあ、まだいたのかっ」となるのだが、客は混乱気味に飴をもらい手を振る。俺もジャック・オ・ランタンがいい。頭の被り物が重そうだが、一番楽ではないか。

でもこの中に入っている人は、誰も知らないくらいこの仕事を長く続けているらしく辞める気配もない。坂さんというおっさんで、いつもかぼちゃをかぶっているのに、真っ黒に日焼けしている。前歯が一本なく、控室ではいつもたばこを吸っている。モンスターハウスのメンツはなぜかみなヘビースモーカーだ。

「坂さん、俺にジャック・オ・ランタン譲ってください。俺まじ吸血鬼とか無理なんです」

俺は半分冗談、半分本気で言ってみた。

「んーでも俺、吸血鬼も長い間やってて、どれももう飽きちゃった。今はもうジャック・オ・ランタンが一番いいよ」

となにか悟り顔で言う。詳しく聞いてみると坂さんも劇団員だった。ジャック・オ・ランタンのほか、吸血鬼もフランケンシュタインも、それから骸骨も白いおばけもゾンビもミイラも、モンスターハウスにあるものは全部したという。すべてそれなりにおもしろかったが、今はもうかぼちゃおばけに落ち着いたというわけだ。

「俺から見たら坂さん、まじ半端ねえです」

僕は心から感心して言った。

「そんなに怖いならなんでこのバイトしようと思ったの」

坂さんはぶはーっとたばこの煙を吐き出しながら言った。

「さあ、俺もよくわからないです」

僕は言った。坂さんは煙草をふかしながらぼくを見ていたが、

「ま、演技だから、演技。おぼけの演技よ。怖いのは俺たちじゃなくて客のほうだから。大丈夫だろ」とフランケンシュタインと同じようなことを言った。演技をしている人は発想も同じなのだ。

「演技ってそんなにおもしろいんですか？」

僕は聞いた。

「うん、おもしろい」

坂さんは顔をしかめてうなずいた。

「なんていうか、中毒みたいだ」

「ふーん、中毒……」

なんだかモンスターハウスは変わったところだ。全然爽やかじゃないし、スタッフが個性的すぎる感じ。

「あの一俺みたいなふつうの学生っていないんですか？ みんな役者？」

「学生。ああ、一人いるよ、なんだっけ？ 木岡だっけ。確かいた。まだやってるのかな？」

「何役です？」

「ミイラだったと思うよ。そうだ今度俺たちの劇、見に来ない？ 案外おもしろいんだよ」

坂さんは立ち上がりロッカーの中をがさごそしていたが、

「はいこれ。千円なの。一回見といても損はないだろ」

と言った。僕はしぶしぶ財布を出した。

舞台には江本と行った。別に行かなくてもいいかとも思ったけどお金を出したことだし、普段モンスターをやっている人たちが、本業はいったいどんなことをしているか興味も沸いた。

「舞台見る日が来るなんて思わなかった」

江本もしぶしぶだ。

「漫才見るような感じなんじゃないかな」

僕はわからないながらも言った。でもそれはかならずしもまちがってはいなかった。舞台は思ってたよりおもしろかった。男と女のすれ違いのどたばた劇で、笑いどころがたくさんあった。坂さんは女がぐちをこぼしにくる飲み屋の店主という役どころで、いろいろと威勢よくはっぱをかけるのだが、それがどれもこれも女にとっては裏目にでるのだった。

「なんか新喜劇のような？」

一時間ほどの劇が終わって外に出ると、江本が言った。

「うん、だな。なんていうか別に悪くないよな」

「俺もっと、なんか悲惨なもの見せられるのかと思った。お遊戯的なものとか、前衛的すぎてわけわかんないのとか」

「あーだな」

相槌を打ちながら、自分は最初からそういう風には思っていなかったことに気付く。結構坂さんに期待していたのだ。

「あーちょっと待って！」

建物を出ようとしてた僕らは呼び止められ振り向いた。居酒屋のエプロンをつけたままの坂さんだった。

「そのまま帰っちゃうっていう法はないでしょ。いやー来てくれてうれしかったよ」

坂さんは僕の腕をばしばしと叩いた。

「あーはい」

僕はちょっと口ごもり、

「思ったたよりおもしろかったです、ずっと」

と言い、

「俺ももうちょっとやばいの見るのかと思ってたっす」

と江本は言った。

「笑ってくれてたじゃない。見えてたよ。次の公演が終わったら飲みに行くんだけどね、どう、二人は」

江本は目で合図してきた。

「あ、はい、じゃ俺だけ行きます」

そう答えたのは、結構かわいい劇団員もいるような気がしたからかもしれない。

あまり何も考えず指定の居酒屋に行くと、どこかの組合か何かの集まりのように見えた。年齢層の幅が広くいろんな人がいる。飲み会というと大学のサークルの集まり的なものしか知らなかった僕は、げっと思った。

「おーい」

坂さんは目ざとくぼくをみつけ手を振った。すでに顔が真っ赤だ。僕はくるりと背を向け店を出たくなったけど、坂さんは手を振り続けている。俺ってこんなに意思、弱かったっけ？ バイト探し以来、自分のへにゃへにゃぶりが目につく。僕は座敷のテーブルの一番隅に座った。

「おいこれがほら、モンスターハウスの新しいドラキュラ。こいつお化けが怖いんだと。それなのにあんなバイトすることになってびびってんの」

と坂さんが遠慮のない紹介をしてくれた。

「どうも」

僕があいまいに頭を下げると、

「えーと名前なんだっけ？」

坂さんが聞いた。

「野木崎です」

「そうそう、野木崎、野木崎」

「ありがとね、見に来てくれて」

僕と逆のテーブルの隅にすわっている女が言った。髪を後ろで束ねた、活発そうな人。二十代真ん中くらい？ もうちょっと上？

「モンスターハウスの他の人ってこの劇団にいないんですか？」

横に座ってきた坂さんに聞くと、

「えーと、どうだっけ？ いたこともあるけど、辞めちまったよ」

「え、どっちを？」

「どっちも。モンスターハウスも劇も」

坂さんは言った。どうして、とちょっと聞けないような雰囲気。

「食ってけないからよ」

坂さんは僕の胸中を当てるかのように言った。

「で、でも食べていけなくても、劇が好きなら」

「なーに言ってる、このぼんくら青二才」

坂さんは僕の頭をはたいた。

「食ってけなかったらどうやって生きてくんだよ」

「あ、はい、すみません」

でも坂さんは食っていったわけだ。

「坂さん、若い人にからむの、やめとけよ」

前に座っているサラリーマン風の人言う。さっきの劇には出ていなかったような。裏方だろうか。

「ま、それが普通といえば普通なんだよ」

坂さんは言った。

「三十くらい、遅くとも四十。みんな現実に目覚めて辞める。辞めなくても、きちっとした他の仕事を見つける。俺も自分でなんで続けてるのか、わかんねーよ。うん、わからんね」

その口調はぐちでも泣き言でもなく、ただの呟きだった。僕はふーんと思った。そんなの別に、演劇に限らず、なんでもそうじゃないか？ 僕だって、なぜモンスターハウスで働いているのかなんて、そもそもなんでこの集まりに参加しているのかだって、よくわからない。

「私はちゃんと目指してるわよ、役者」

さっきの女の人が、テーブルの向こうの端からこっちの端に向かって言ったものだから、一瞬みんながしんとなった。いろんな立ち位置の人がいるんだろうか。僕はちょっと不思議な気持ちになった。さっきの芝居を見る限り、だらだらとした気持ちで演劇をやっている人がいるとは思えない。

それにしてもいい大人が、なんでそんなに一つのことにのめりこめるのか？ もっと他に大切なことはないのか？

「あーうんわかるわかる。俺もそう思ったもん」

僕以外の唯一の学生バイト、木岡さんに出会ったのは、バイトを始めて一か月もたったころだ。怖かったけど他に収入源がなかったため、僕はモンスターハウスのシフトを結構たくさん入れていた。木岡さんは他にバイトを掛け持ちしているらしく、なかなか顔を合わせる機会がなかったのだ。

「でも、まあもう慣れたけど。ほんと人それぞれっていうか。俺はそういう情熱みたいなものないから、ちょっとうらやましくも思うけど、やっぱり大変そうだよな」

木岡さんはミイラコスプレの包帯をほどこきながら言った。腕の部分だけには毎度、本物の包帯を巻くのだ。

「あーうんわかるわかる。俺もそう思ったもん」

僕以外の唯一の学生バイト、木岡さんに出会ったのは、バイトを始めて一か月もたったころだ。怖かったけど他に収入源がなかったため、僕はモンスターハウスのシフトを結構たくさん入れていた。木岡さんは他にバイトを掛け持ちしているらしく、なかなか顔を合わせる機会がなかったのだ。

「でも、まあもう慣れたけど。ほんと人それぞれっていうか。俺はそういう情熱みたいなものないから、ちょっとうらやましくも思うけど、やっぱ大変そうだよな」

木岡さんはミイラコスプレの包帯をほどきながら言った。腕の部分だけには毎度、本物の包帯を巻くのだ。

「ところでお前は慣れたのか？　なんかお化けが怖いバイトが入ってたって聞いたけど」

「あ、うん。ドラキュラはダンディな外国人で、それが男やら女やらをナンパしているって設定に自分の中ではしてある。自分ではダンディなつもりなんだけど、ほんと趣味が悪くてエキセントリックだから、声のかけ方もおかしくて、みんな逃げちゃうってこと。なんとかこれでやってる」

すっかりミイラコスプレを脱いだ木岡さんは、

「それはまあ、それがドラキュラなんだけど、まあお前がそれでやってけるんならそれでいいっていうか……」

と呟いていた。○僕はドラキュラコスプレを着た。黒いスーツに長いマント。牙を入れ、顔を入念に白く塗る。目の周りにアイライン、赤い口紅。ワックスで前髪をぐっと上げて額を出し、最後に上げ底の革靴を履く。

「お前、結構似合ってるよ」

初めて僕の衣装姿を見た木岡さんが、ちょっと感心したように言った。

「もともと色白でたんぱくな顔立ちだから、メイクが映える。これであと十センチ背が高かったら、本物のドラキュラに昇格できるよ」

「木岡さんも、そっち系の人なんですか？」

僕は焦って聞いた。

「そっち系？」

「あの、演劇の」

「ああ、俺は違うよ。俺はほんとただのバイト。金がいるから。ここ、時給悪くないし、だから続けてるっていう。安心した？」

最後のほうは笑いながら言った。

モンスターハウス

スタンバイオッケー。僕はびくびくしながら客を待つ。僕がいる部屋の一角は全くの闇で、客が鏡のほうへ歩いていったら背後から忍び寄る。

「うわー！」

と言って両手を上げる。客の絶叫。とにかく怖がらせてなんぼの世界なので、客が出ていくまで演技続ける。そうやっぱり演技なのだ。自分がドラキュラだと思い込まないことには、客だって怖がってくれない。最初のころなど、

「え、何、ドラキュラ？ ただのハロウィンの仮装じゃん」

と客に馬鹿にされることなど、日常茶飯事だった。結局フランケンシュタイン先輩が言ってた、「大丈夫、演技だから」という言葉があったということになる。ちなみに僕はこのフランケンシュタイン先輩の演劇のチケットも買ってしまった。珍しく木岡さんも買っていた。僕たちは二人で舞台を見に行った。

ストーリーはお化け退治に集まった村民が、お化けを追い続けているうちに昔を思い出したり目を背け続けていた問題に直面することになったりという筋で、どう考えてもモンスターハウスがモチーフになっていた。

「なあ宇治野さんて脚本書くのかな」

僕はフランケンシュタイン先輩の名前を初めて知った。

「なんか言われてみれば、書きそうな。なんでもできそうですね」

この劇も僕たちの予想に反してわかりやすくそしておもしろかった。終わった後、僕は木岡さんと二人で飲みに行った。

「この前、坂さんの劇を見たときは、劇団の人たちと飲みに行ったんですよ」

「まじ？ 知ってる人って坂さんだけだろ？」

「俺、そういうのは割と平気なんです」

「お化けは怖いけど」

言われると思った。

「俺もどこでもだれとでも適当にやれるけど、劇団の飲み会には参加しないかな」

「なんかかわいい子がいたような気がしたんですけど、気のせいでした」

木岡さんはぷっと笑った。

「なんか姉御肌のような年上の女の人が出た。大学の飲み会とかとだいぶ雰囲気違いました」

「そりゃな、好きでやってることだしな」

「木岡さんってなんのバイトとかけもちしてるんですか」

「引越し屋。これも払いはいいからさ。仕送りないから必死よ」

僕も仕送りでは足りなかったが、木岡さんは本当に生活がかかっているようだ。

「だからさ、あとは単位とって卒業して就職するってことしか今は考えてないわけ。だからってわけでもないんだろうけど、宇治野さんとかモンスターハウスの人たちって俺、結構好きなんだ

。一生懸命っていうかさ。ちょっとばかみたいって思ったりもするけど」

　　モンスターハウスのお化けが怖いんじゃないのかもしれない。僕は何かに本気になるのが怖い。本気で生きるのが怖い。だってそこには、もしかしたら、お化けなんかよりよっぽど怖いものが潜んでいそうな気がするから。でもこんなことを言ったら、それこそバカにされるだろう。今僕ができることは……できることは、せめてドラキュラを本気で演じ切ることかもしれない。

　　かくして僕は、モンスターハウスの立派な一員となった。

魔法の杖の模様

魔法の杖をプレゼントされた。

「やったー」

と言って無邪気に喜ぶほど幼くもなければ、

「こんな棒切れいらん」

と思うほど夢がないわけでもなかった。

「疑ってるでしょ」

杖をくれたお兄さんは言った。お兄さんはアパートの隣の部屋に住んでいた。でももう、故郷に帰るといふ。

「丹精こめてつくったから、ひとつくらい良治の願い、叶うと思うよ」

お兄さんは面白いものをたくさん持っていた。魂を量る計りとか、悲しい気持ちを鎮めるあめとか。お兄さんは画家だった。

「ねえ、絵、やめちゃうの？」

故郷に帰ると聞いた時からお兄さんの背中に寂しさのようなものを感じていた。

「さあ、わからないよ」

お兄さんは言った。本当にわからないという顔をしていた。僕はお兄さんがくれた魔法の杖を見た。うねうねとした何かわからないもの、龍？ 何かの植物？の複雑な模様が丹精に彫りこまれてあった。

「絵はやめないほうがいいと思うよ」

僕はその杖を見ながら言った。

「へえ、なんで？」

お兄さんは部屋のを段ボールに入れながら聞く。いる、いない、いる、いない。部屋の隅は知らないものの山ができていた。

「さあ、わからないよ」

僕はお兄さんの口調をまねて言った。

「なんとなく」

「ありがとな」

お兄さんは僕の頭をなでた。僕はなんとなく思った。魔法の杖はお兄さんには効かなかったのか？ お兄さんは諦めて故郷へ帰るのか？ でもどう聞いたらいいのかわからなかったし、聞いていいのかもわからなかった。僕は所在なく部屋をうろうろと歩き回った。

「隣の部屋にお兄さんがいないと思うと、つまらないよ」

僕は言った。上出来。僕は大切な時に大切なことを伝えるのが、苦手なのだ。

「俺も隣に良治がないと思うとつまんね一な」

お兄さんは片づけを中断して、僕のほうを向いた。僕はくすくすんと泣き始めた。

「じゃあ良治、俺と一緒に九州に行くか？ ん？ 牛がいっぱいいるし、さつまいももあるぞ」

お兄さんは僕を抱き上げた。うなずいたら連れて行ってもらえると思うほど、我を忘れて泣いてはいない。でも泣き止むほど気持ちを立て直せてもない。僕はだらだらと涙を流し続けた。

「魔法の杖で～なんでも叶えばいいのにな～」

お兄さんはでたらめの歌を歌い始めた。でたらめだけど、僕は耳を澄ませる。

「なんでも叶えば～なんでも叶えば～ゆめの国～」

お兄さんは変な音頭で部屋を歩き回った。

「ゆめの国にはなんでもあって あめがたべほうだい～ さつまいももたべほうだい～さつまいもを食べたらぷくぷく太って 空をとぶ～空をとぶ～」

僕は魔法の杖を振り回したけど、特に何も起こらなかった。僕はがっかりして、

「やっぱり魔法なんてないね」

と言うと、お兄さんは、にやっと笑って、

「ふーん、良治はそう思うんだ」

と言って、僕をおろした。僕は腹を立てて杖を部屋の真ん中に放り投げた。お兄さんはかまわず、

「なんでも叶えばいいのにな～」

と歌いながら引っ越し作業を再開した。僕はなんでも叶うことなんてないんだなとぼんやりと思った。そして自分が投げだした杖をつまんだ。一体何を彫ったのだろうか？ 爬虫類のような、鳶のような。

「へんな柄だろ」

お兄さんは言った。

「俺がアジアを旅行したとき壁の模様にそんなのがあったんだよな。それを思い出しながら彫った」

「ふーん」

僕は魔法の杖をぶんぶん振った。お兄さんの部屋のものが片付いていくだけだった。

「僕も将来はアジアを旅行できる？」

「さあ良治がそうしたけりゃできるよ。そういうことで魔法の杖はいらないんじゃないかな」

「じゃあどういふときにいるわけ？」

僕は喧嘩腰で聞いた。

「そうだなあ」

そんな僕に取りかわずに、お兄さんは考えた。

「例えば好きな子が前に立っていて、その子にこっちを振り向いてほしいとき。そういうときに魔法の杖をちょちょいと使えば、その子はふとこっちを向いてくれるかも」

「それは魔法じゃなくて、僕の念力だよ。念力でその子はなんだかこっちを見なくちゃいけない気がするんだよ」

「んー、そうともいうかもな」

お兄さんはあっさりと認めた。

魔法の杖の模様

「ねえどうして帰っちゃうの」

僕は素直に聞いてみた。

「んー俺、もう諦めちゃったんだ」

「何を？」

「んー」

お兄さんは言おうとしないので、

「画家になること？」

と聞いた。お兄さんは僕に顔を向けた。お兄さんの暗い顔を見るのは初めてだった。

「でもどうして諦めるの？」

お兄さんの絵はうまかった。ただならぬうまさだった。跳ねる馬は、踊る色は僕を不思議の国へと誘った。お兄さんが絵を諦めるのなら、いったい誰が絵を描くっていうんだろう？

「なんかもう疲れちゃったんだよ」

「でもぼくだって学校に行くのもう疲れちゃったよ。でも学校に行かないわけにはいかないよ」

「なんで？ 学校に行くのやめたらいいよ。別に勉強なんてできなくたって」

お兄さんはむっつりと、片付けて少しは広く見える床に座った。こんな子供みたいなお兄さんを見るのは初めてだ。お兄さんは大人で僕は子供。僕はお兄さんに遊んでもらう。いつだってそう。

「みんな疲れることあるよ、ね？」

僕はお兄さんの肩に手をかけた。変な気分だ。いつもとは立場が逆だ。お兄さんは子供で、僕は大人。

「うん……」

お兄さんは顔を足の間に突っ込んで何もしゃべらなくなってしまった。僕はその横でじっとりと汗ばんできた手で杖を握りながら、お兄さんが引越しをやめますように、やめますように、と念じ続けた。

参考文献

「生きものの持ちかた」 松橋利光著 大和書房 2015年8月